

現代社会の行方と日本

京都大学こころの未来研究センター特任教授・
京都大学名誉教授

佐伯 啓思

先日の衆議院議員総選挙で、いくつか気になることがありました。1つは、選挙によって安倍首相の方針が承認されたということになります。自民党はこの十数年間、とにかく日本をどんどん変えていかないとだめだと言っているのですね。

それに対して、野党は生活や弱者を守れ。憲法を変えるなど言っています。自民党は変え過ぎていると言っています。何だかねじれて奇妙なことになっています。本来の保守とリベラルが一体どういう形になっているのか、何が保守で何がリベラルか、実は非常にわかりづらくなっています。

それからもう1つ、今回の選挙で地方の問題は全く議論されませんでした。地方をどうするかということは、実は今、非常に大事な日本の課題です。

地方の問題は安倍首相の経済政策とも密接に関係する問題ですが、どの党派も地方をどうするかについては、ほとんど正面から取り上げませんでした。

本当に大事なのは、消費税や教育の無償化等を全部含めて地方の生活をどうするのか、東京と地方の関係をどうするのか。もっと大きく言えば、日本の国土計画はどうするのか。そういうことを10年、20年の長期タームでおおよその見当をつけることが大事です。防災への対策も入ってきます。さらに当然ながら、その前提として人口減少社会と高齢者社会ということがある。あと20年もしたら、人口の30%以上が高齢者になり、300万人近くが認知症になる。さらに今の状況で言えば、30万、40万の老人が住む場所がない、つまり介護施設が足りなくて社会に放り出される。路頭に迷うと言われています。これは大問題です。地方をどうす

るかということと関係していますね。どうして、これが今回の選挙の争点にならなかったのか不思議です。

グローバル競争が生み出す 格差社会

アベノミクスの第1の矢とか、第2の矢とか、それはそれで問題もあるが、今のところインフレについては、わずかながらプラスのほうに動いています。デフレはだいたい脱却ですが、かといって2%のインフレにはならない。大体2%のインフレを掲げる必要はないと思います。1%だっていい、0.5%だっていいわけです。

デフレ脱却はその意味ではおおよそ、実現されつつある。それから、経済成長のほうですが、政権が発足したころに比べればGDPは増加している。最近の四半期の成長率は3%強でそう悪くはないでしょう。株式市場はすごい勢いで高騰しています。東京に来たら、ほんとに日本経済は活気があって、ミニバブルでしょう。だけど、地方に行くと全然違います。地方都市の光景は、全然そんな風景とは関係ない世界ですね。

現代のグローバル競争に勝つためには、日本経済を成長させなくてはだめだ。そのために徹底したイノベーションを行って、生産性革命を行う。新技術を導入して、競争力をつける。いち早く新しい技術を開発して導入していけば、人口減少にも対応できる。そうしたら、日本経済はまだ成長し、グローバル競争に勝てるという話になっているんです。

仮に、これがうまくいったら、結構なことかもしれないですが、大きな格差を生みます。新しい技

佐伯 啓思 (さえき けいし)

略 歴

昭和47年東京大学経済学部卒業
昭和54年同大学院経済学研究科博士課程単位取得
広島修道大学商学部講師、滋賀大学経済学部助教授、滋賀大学経済学部教授を経て、平成5年京都大学大学院人間・環境学研究科教授。平成27年より現職。

委 員

第4期文部科学省中央教育審議会委員

受 賞

昭和60年 サントリー学芸賞：『隠された思考』
平成6年 東畑記念賞：『「アメリカニズム」の終焉』
平成9年 読売論壇賞：『現代日本のリベラリズム』
平成19年 第23回正論大賞

主な著書

『自由とは何か』（講談社現代新書）、『日本という「価値」』（NTT出版）、『現代文明論講義ニヒリズムをめぐる京大生との対話』（ちくま新書）、『西欧近代を問い直す』（PHP文庫）、『20世紀とは何だったのか』（PHP文庫）、『経済成長主義への訣別』（新潮選書）など多数



術にアクセスできる者と、あまり新しい技術の恩恵を受けない者の間に、非常に大きな格差ができるでしょう。従来の伝統的な産業だとか、地方の地場産業だとかは大した恩恵は及ばない。そういうところは大きく賃金上がるわけでもないし、生産性が上がるわけでもないでしょう。それは所得格差をもたらすし、都市と地域との格差はもっと拡大するでしょう。

私は安倍首相のこの成長戦略政策は、あまりうまくいかないだろうと考えていました。

経済学的に言えば、経済成長率は、労働人口の増加率プラス生産性の上昇率で、労働人口の増加率と労働生産性の増加率が経済成長に寄与します。ですから、労働人口は減少しても労働生産性が上がれば、経済成長できる。経済学者は技術革新をやり、AIやロボットが入ってきたら、ものすごく効率的にやってくれるから、1人当たりの労働生産性が上がると言います。

これは、経済学者が話を単純化していますね。労働生産性の定義は、GDPを労働人口で割っている。労働人口、これは労働時間を含めて調整したのですが、労働時間掛ける労働人口といいますか、要するに総労働量。総労働量でGDPを割り出します。だから労働生産性を上げる簡単なやり方は、分母を減らすことで、労働人口を減らせばいいのです。

GDPが同じだとしましょう。新しい技術が導入され、労働時間が減る。そしたら、分母が減りますから生産性は上がります。1つひとつの企業が生産性を上げる一番簡単なやり方は雇用者を減らすことです。そうするとどうなるか。場合によっては失業が起きます。もしくは所得が下がるから、

消費が増えない。消費が増えないことは、実はGDPも大して増えないのです。

GDPは、一方では生産量、他方では消費量に依存します。企業がいくら頑張っても、供給能力を増やしても、消費者がそれを買わなければGDPは増えない。だから、GDPを決めるものは生産能力であると同時に、他方では消費能力です。GDPがゼロ成長でも、労働時間が短くなって雇用は減れば生産性は上がっている。そうすると、確かに生産性は上がった。だけど、経済成長はしない、GDPは増えないのです。

安倍首相は労働時間を短くしろと言っています。そうすると、数値的には生産性は上がる。だけど、残業手当ももらえない。所得は増えないから、消費は増えない、GDPは増えない。そういうことが起きるに違いないと思います。

「いま成長そのものが 問い直されている」

1950年代、60年代の日本の高度成長は、年率10%ぐらいで成長しましたね。人口成長率は、もちろんそんなに多くはありません。仮りに一年で2%ほど成長したとしましょう。そうすると、8%は、技術革新のおかげだということになる。

あのころの技術革新は、本当にすごいものです。次から次へと全く新しい電気製品、洗濯機が、掃除機が、それから炊飯器が出てくる。もうこれだけで、主婦の生活が完全に変わってしまう。主婦の労働が一気に軽減されました。そして、1か月分の給料を払ってテレビを買ってきて、買えない近所の人たちがみんなテレビを持っている人のところに集まってきて、みんなで楽しみにして、相

撲や野球を見たのです。自動車の普及もありました。膨大な中間層が作られ、それで、文字どおり我々の生活が豊かになっていき、それが消費を生み、消費が新しい技術革新を生み、この技術革新が、また新しい消費マーケットにつながった。そのときには、確かに人口が増加しようがしまいが、技術革新で生産性が上がれば、その分が需要に変化してってGDPがどんどん上がっていった。

だけど、今は技術革新がそれを可能にするとは、ちょっと考えられません。生命科学も恐らくそうですね。iPSだとか、遺伝子操作、そういうものが何をもたらすのかよくわかりません。

iPSの場合、確かに潜在的な力としては医療を大きく変えてしまう可能性はあります。しかし、その開発にけるお金は、膨大です。したがって、iPSがもし仮に実用化されれば、当初、この恩恵にあずかれるのはほんのわずかな人です。iPSの開発でも、既にかなりのお金をかけています。

しかし我々が注意しておかなければならないのは、そういうものが成長戦略になるわけじゃないことです。今はとにかくそれをできる限り早く実用化しようという国際競争になっている。それを成長に結びつける競争です。これは根本的に考え方が間違っている気がします。考えてみてください。iPSが成功する、あるいは本当にスタップ細胞が成功して、夢の長寿も夢ではなくなったとします。そうしたら、我々は現在のところ80いくつで死ぬことになっていますが、仮りに120歳ぐらいまで生きるとどういうことになるのでしょうか。しかし人間の健康寿命は、80歳ぐらいでストップでしょう。

ということは、30年、40年、働かないで病院と自宅を行ったり来たりする老人がものすごい数になります。その120歳ぐらいになった老人が、ドローンに乗って病院に行って、AIに治療してもらうと。こういうことはSF作家でも考えつきませんでした。しかし、今やろうとしていることはそういうことです。

話を戻しますが、私は別に成長するなど言っているわけではないのです。問題なのは、成長すればいいという考え方です。今この状況で何が何でも成長しなければと言ってしまうと、社会に大きなひずみを与えてしまうのではないかと思います。今後、仮に成長できるとしても、その成長は、か

なり多くのひずみを生みだすでしょう。それなら、経済成長政策は、ある適当なレベルで諦めて、ゼロ成長でいい。まあ1%いけばいいぐらいに考えて、それを前提に次の社会を構想していかなければならないと思います。

巨大なストックが維持される ゼロ成長の世界

先ほどの話に戻しますが、安倍首相の成長戦略について、多くの勘違いがあります。それはまず経済成長をしないと、どんどん我々は貧しくなってしまう。GDPゼロ成長というのはよくない。ゼロ成長だと我々は貧しくなると言う人が多いのです。

これは、根本的に間違っています。GDPとは何か。それは、1年間で新しくマーケットを通してつけ加わった価値です。1年間で企業は生産する。それがマーケットに流れて売買される。それをマーケットで評価した、その価値額を全部足し合わせたもの、これがGDPです。

簡単に言うと、GDPは1年間でつけ加わったフローです。もう我々はここにものすごく巨大なストックを持っている。この巨大なストックの上に乗れば、今年度は新しくGDPの分が付け加わった。したがって、成長とは、この付加分を増やすわけです。今年はこれだけを新しくつくりました。来年はこれよりもっと付加分を大きくしましょう。これが成長率になるわけです。

ではゼロ成長とは、どういうことか。今年も来年も今までのストックの上に、この新しいものが同じだけつけ加わったということです。それで、ことしの付加分の半分か3分の2ぐらい、それは消費されてなくなってしまうでしょう。だけど3分の1ぐらい、また新しくこの上につけ加わってストックになる。建物を建てれば、その建物はストックになります。例えば、ここが山だとすれば、この山はまたちょっと大きくなっている。来年これと同じだけやりましょう。これも半分ぐらいは消えてなくなるでしょう。だけど、半分か3分の1ぐらい、また新しくここにつけ加える。ストックとしてはついていく。ストックとして増えることは、我々は豊かになっているのです。

ですから、問題はストックです。ストックは普通、マーケットで計測できません。消費は大体6

割ぐらいです。企業は3割ぐらい投資する。企業が3割ぐらい投資したものが、基本的にストックとしてここにつけ加わっていく。もちろん、古くなったビルを建て直すことはありますけれども。それにしても、500兆円のうちの何割かは明らかにストックとして、この山が大きくなります。ゼロ成長でも、我々の富が増えていっている。何も貧しくなっているのではないのです。

ただ、中国が6%成長していくのと比べれば低いでしょう。それは、もう発展の段階が違います。日本はある程度、成熟の段階まできてしまった。特に若い人を見てみると、そういう感じがしますね。

今の若い人たちは、基本的に大してものを欲しがっていない。学生としゃべっていると、彼らは車に関心がない、新聞もとらない、本もほとんど読みません。今の若い人たちは喫茶店にも行かない。服も、80年代は特に若い女の子がブランド物に群がりましたが、今の若い子たちは、大してそんなものも必要ない。そして彼らはスマホ1台で、生活が足りてしまうのです。消費が増えるはずがないのです。

今、若い人たちは、むしろこの状態が続いていけばそれでいいやということになる。今あるこの状態は、成長率では中国には勝てないかもしれないけど、維持はできます。これが、我々が持っている奇妙な誤解の1つですね。

それから2つ目に、経済成長すれば無条件で人間の幸せになるだろう、富を蓄えることが我々の幸福に直結するだろう。少なくとも、それは我々の幸福にとって悪いことじゃない。こういう思い込みがあります。

経済成長がそのまま、イコール我々にとってプラスであるという理由はどこにもありません。60年代のような時代は経済成長して、我々にとって必要なものがどんどん手に入り、生活が便利になり、それで幸せを感じることができました。しかし、今はそうではないのです。経済成長をしても、成長することが人間の幸せにつながるとは限らないのです。

90年代から始まった 家庭と教育の崩壊

もう1つ、経済成長をすれば、人間の幸せにつ

ながることの根本的な限界は、我々が長い時間をかけてつくってきたストックはすべて、市場で評価される訳ではないということです。市場で測定されないものは、このGDPの中に入りません。

地域の生活というのは、GDPに反映されないものがずいぶんあります。例えば今、そこに住んでいる人が自分の町は住みやすいという実感を持つ。そういうアンケートをとると、大体、地方都市になる。しかし、GDPで見るとやっぱり低いでしょう。低いけれども、幸せ、あるいは豊かさの実感はそこへ住んでみないとわからない。それは、マーケットでは測れないのです。

いま人間が一番欲しがっているもの、一番必要としているものは何か。簡単に言えば、人間関係なんです。信頼できるような人間関係が、自分の身の回りにあることが一番大事です。けれども、信頼できる人間関係は、マーケットでは捉えられないですね。

マーケットに入れようとすれば、信頼できる人間関係を崩していったほうがいい。例えば家族がばらばらになって、皆がそれぞればらばらに働き出したほうがいい。家の仕事は家政婦さんを雇う。あるいは、外食を皆で食べに行く。こうやれば、GDPは増える。だけど、そんなことばかりやっていたら、信頼できる人間関係がなくなっていきます。

90年代ぐらいから、日本社会は非常に大きく変わってきて、いわゆるIT革命といいますか、情報化の時代になりました。やはり第1の問題は家族とか地域、それから教育を崩壊させていったことだと思います。それは、いくつかの理由がありますが、端的に言えば、あまりに競争が激しくなり構造改革が起こって、企業は生産性競争をやり出した。雇用を非常に不安定なものにしたのです。

今まで家庭にいた女性も働かざるを得なくなりました。子どもは家に帰ってきて誰もいません。そこに携帯電話が普及してくる。子どもたちも携帯電話を持ってないと、俺は学校でいじめられるんだという話になってしまう。こういう話に親は弱いんですね。そこで買い与える。そうしたら、子どもは携帯電話を持って飛び出して行って、夜中まで帰ってこない。90年代にはそういうふうになりました。

これでIT関係のマーケットは大きくなり、GDP

は増えました。しかし、家庭とか地域は崩壊している。そこで次に教育がうまくいかなかった。学校の先生もたいへんにいら立っています。学校の先生に対する負担が増えました。私は日本の一番大きな問題は公立学校の教育だと思っています。特に中学校だと思いますが、これは本当に大きな問題だと思います。学校の先生も、気の毒です。全く時間がとれない。だから、いらいらしている。

それは国というより地方で解決していかなければならないのです。親のほうも、子供を見放してしまっている。親も子どもを管理するだけの余裕がなくなっている。親がそれを全部学校にあずけてしまう。先生、何とかしてくれ、そんな話なのです。やはり地域で何とかしていく、地域を立て直していくことが求められています。

「日本的な組織にもアメリカ流の効率第一主義が流入」

先ほどの、生産性を上げろという話も言いかえると、効率性を高めることが、いつの間にか至上命令になってしまいました。しかし根本的に言えば、いくつかの問題があって、まずどうして効率性を高めることがそんなに大事なのか。インプットもアウトプットも、我々の目に見えない部分がある。特に日本人にとって人間関係は大事です。そこはアメリカ人とは違います。

アメリカ人は個人主義で1人ひとりの能力を評価する。自分はこれだけのアウトプットを出し、これだけの成果を出した。だからそれだけの賃金をくれという、これがアメリカ人の基本的な考え方です。だから、アメリカ人は能力主義に対して、非常に適合性が高いです。

しかし、日本人はそうではありません。日本の企業は、1人ひとりがばらばらに働いて俺のほうが増えたら成果を上げたから、俺のほうに給料を2倍くれと。こんなことは、誰も言わないです。

企業の経営者もそうですね。企業の経営者でも、この1年間で業績を上げないと、すぐ首になってしまう。それでは、まともな組織は運営できません。日本の企業、日本の組織の考え方は、短期的には効率性はあまりよくないかもしれません。しかし、長い目で見れば、ある程度安定して持続的に10年、20年一定の成果を続ける。それなりの雇用を確保してくれる。信頼を得る、あるいは周り

からそれなりに支持される、それで安定している。こういうことも、日本人にとっては広い意味で効率性に入ります。

そういう日本の中にアメリカ型の効率性、アメリカ型の経営、アメリカ的な考え方が入ってきてしまった。これを徹底したのが90年代ですね。こういう考え方で日本企業、あるいは日本経済の構造を変えていこうとした。それは企業だけならいいけれども、皆さん関係されておられる行政の現場まで効率主義が原則、入ってきてしまう。これは実は、アメリカ型の考え方なのです。

経済成長をすることは、そのまま自分の幸せにつながるのではないか。それから、効率性を達成することは大事なことで。経済学者、あるいは経済学的な思考をする人は言います。政府の関係者もそうですね。我々は、そういうことに簡単に騙され過ぎている。90年代の構造改革以来、アメリカ的な考え方が、簡単に日本に入ってきてしまった。それが今、日本で地域と都市の格差をこれだけ広げたと、若い人たちの生活が非常に不安定になる。家族というものが崩壊の方向に進み、学校がうまくいかなってしまいました。

「成長の限界」と「スモール・イズ・ビューティフル」をめぐって

昔のことをちょっと思い出しているのですが、私が大学院に入って経済学を勉強していたのは、1970年代の初頭です。今から思うと大きな社会の変わり目でした。アメリカが世界の中心になった時代が、もう終わりつつある、そういう時代でした。あのころ、私は経済学をやっていたけれども、誰も資本主義経済といいますが、市場経済が万能だなどと考えていた人はいません。むしろ経済成長の時代は終わった。これから別のステージに入るの、そのステージをどう考えればいいのか、そういう議論が中心でした。

当時1972年だったと思いますね、ローマ・クラブというアメリカのMIT（マサチューセッツ工科大学）の学者が中心になって、環境問題と資源問題を取り上げた『成長の限界』という本を出して、世界的な大ベストセラーになっていました。この勢いで世界中が経済成長を続けていったら、やがて必ず環境問題と資源問題が限界点まできてしまう。だから、今のうちに成長率を下げて、持続的

成長をできるような社会構図をつくっていかないとだめだと提案しました。

それから、その当時もう一つ大ベストセラーになった本で、シューマッハーという人の『スモール・イズ・ビューティフル』という本がありました。世界的ベストセラーになりました。僕もこの本を学生時代に読みましたが、あんまり記憶には残ってなかったのです。この本の内容は、当たり前のことだと思いました。

規模を大きくするのではなく、小さいほうが大事だって、そういうことを示した。人間が自分に見合ったスケールで生きることが大事だってことを書いている。私は、あまり当たり前すぎておもしろくなかったんですが、最近ちょっとそれをもう一度読んでみて、今こそ本当に必要な本だなと思いました。とても新鮮に響きました。

成長は限界にあるだろう。人間にとって大事なものは、自分が自分の手で何かをつくって、誰かと結びついて、誰かに何か大事なものを与えて、それで自分の生きがいを感じることで、それが人間にとって一番大事だというのがこの人の主張ですね。俺はこういうことをやっている、そういう実感を持てることが一番大事なことだ。そのためには、適切な規模がある。彼は簡単に言えば、地域こそがそれができるという主張です。あたり前の話なのですが、私は今こそ必要な本だなと思いました。

シューマッハーという人は、もともとドイツに生まれて、ナチスを逃れてイギリスにやって来た人で文明批評家です。イギリスに移住してきたときに仕事がありませんでした。農業労働者として農園に雇われて、牛の頭数を数える。それを毎日ちゃんと報告する仕事をやる。ところが、あるとき、牛の数を数えてみたら1頭足りない。探してみたら、森の中で死んでいる。彼ははたと気づいた。自分は数が合っていればそれでよかった。しかし、もしも自分が牛の状態をちゃんと見ておれば、あの1頭を死なせることはなかった。で、自分と牛との間にももっと親密な関係ができたはず。自分が、そうしたらもっとこの仕事に誇りを持てたろうと。

問題は量じゃなく質、あるいは関係性であるということです。

繰り返しますが、彼は『スモール・イズ・ビューティフル』の中で、20世紀の後半の最大の

問題は地域をどうするか、人口分布の問題があると書いています。当時は人がどんどん大都市に行ってしまう。逆に言えば、成長できない社会は地域に人が分散していかないとだめなのですね。地域に分散すれば、あんまり大きくならない適正な規模のコミュニティー、適正な規模の人間関係が維持できる。そういうことこそが、20世紀後半のほんとに問題だというふうに彼は言っています。

しかし、80年代以降、アメリカにレーガン大統領が誕生して、レーガン大統領は徹底した市場競争路線に乗ってグローバル化路線に入ってしまった。それから、世界がどんどん変わっていった。全く逆の方向に変わりました。

しかし、80年代から始めたことが、今ほぼ、その限界があらわになっています。しかも、世界全体の成長率はどんどん下がってきている。戦後から80年代までと、80年代から今までと比べれば、明らかに80年代までの成長率のほうが高く、80年代以降、成長率は世界中が下がっている。日本も顕著です。60年代が9%から10%の平均成長率。70年代から80年代にかけて5%ぐらい。80年代の後半から90年代には下がってくる。90年代はほぼ1%。リーマンショック以降は0.2とか0.3%。ここまで下がっています。世界全体でも、似たような傾向ですね。

ですから、明らかに、今、我々は一つの大きな社会の転換期にある。グローバル化し拡張していった、それで成長できて、人間が幸せになるという時代はもう終わっているのです。

地域が現在、むずかしい状況だというのは非常によくわかります。私もこれまで日本の県庁所在地はだいたい、講演や何やらで、ほとんど全部回りました。最初、駅におけると、どこもかしこも、かなりさびしい状態です。しかし1泊や2泊して、ちょっと向こうの人としゃべったり、車でその辺の郊外を回ってみたりすると、また違う景色が見えてくる。そこに住んでしまえば、これはこれでいいだろうと思う。ある種の豊かさみたいなのがあって安心できるし、知っている人たちが周りにいるし、それなりの病院もあるし、交通の混雑もありません。ついでに言いますと、地方へ行くと、子どもたちがきちっと挨拶しているところが多いように思います。道ですれ違ったりするときにあいさつをする、そういうことも大事なと思うのです。